

眼下に広がるサバンナに見とれる (東ツァボ)

ケニアで最初に訪れたのはここ東ツァボである。いきなり眼下に広がるサバンナ、ヴォイサファリロッジからの眺めは鳥肌が立った。

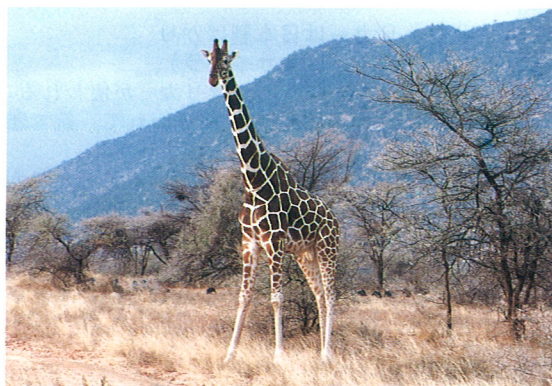
「野生の王国」を肌で感じさせてくれる。

エランド、ゾウ、シマウマなどが何処からともなく現われては姿を消し、そして「これがアフリカなのだ」と誰もが思う。

最も有名なマサイ族(マサイマラ)

マサイマラ、アンボセリに住み、その勇猛さであまりにも有名である。スラリとした長身で、細長い顔立ちをしている。

家の中に入れてもらおうと、ヤリを持った少年がにこやかに迎えてくれた。彼の目に例えようもない美しさを感じた。「これもアフリカなのだ…と」



見事な網目模様のアミメキリン (サンブール)

三種類は見たいと思っていたが、マサイキリン、アミメキリンの二種類が観察できた。

このアミメキリンは特にきれいだった。その顔はオードリー・ヘップバーンを思わせられる。本物の野生の美しさを感じさせてくれる。アカシアのトゲにも平気な舌、口を持っていて、葉を食べる。

ハタオリドリWeavers の巣

ハタオリドリは外敵を避けるためにアカシアの木の枝先に巣を作る。下に垂れているところに巣への入口があるのは種類の多いハタオリドリに共通している。入口が底から少しずれているが、これは風が吹いても卵やヒナがおっこちないためには都合がよい。この巣を作るために、鳥たちは草を一本一本くわえて運んできて、機織りのように巣を作る。種によってこの巣の形が異なる。





ダチョウ Ostrich

サンブール国立保護区で道路の直ぐそばで木の葉を食べていた。

現在、生きている鳥の中でも最も大きく、高さは2.5mを超える。サバンナを太い足で猛スピードで走る姿は見事である。雄は黒っぽく、雌は灰茶色なので見分けがつかないが、若い鳥は分かりにくい。

肉食獣を警戒するトピ（マサイマラ）

レイヨウの仲間、顔の中央部が黒く赤茶色、両脚のつけ根部分が黒いのでハーテビストとよく区別が出来る。

シマウマが互いの背中に頭を乗せて警戒するのに比べ、トピは高い所に上がり互いの向きを変えてそれを行う。



サファリカーは日本製ばかり
（マサイマラ）

国立公園内では全てサファリカーが使われる。車から降りると、密猟者に間違われて、銃で撃たれても仕方ないと言われている。

屋根が手動で写真のように上げることができて観察しやすいようになっている。助手席側のドア横の黒いパイプはエンジンに送り込む空気取り入れ用である。（土ほこり防止）

シマウマは動物園のものよりはるかにきれいで太っている。

アフリカスイギュウとサギの共生関係
（サンブール）

スイギュウが動くとき草むらにいる虫や小動物たちが出てくる。それをいただくサギは、危険が迫ると飛び立つ。スイギュウはサギの行動から危険を早めに察知することができる。

このような共生関係は、スイギュウやキリンとこれらにたかる虫を食べるウシツツキなどの鳥にもみられる。アフリカスイギュウは草食動物の中で最も気が荒い。





カラフルな音符の鳥たち

アフリカの鳥は種類が多く色彩も見事である。この木にはツキノワテリムク（ムクドリ科）の群れがとまっていた。綺麗な楽譜を見ているようで楽しい気分になる。今回の調査で鳥は、209種が観察された。

クロサイの食事風景

マサイ・マラ動物保護区で。このサイは角がよく密猟者に狙われる。象とともに激減した動物の代表。おとなしく、ふだんは茂みで姿を隠している。雌の角は雄よりも小さい。陸上では象について大きい動物。嗅覚、聴覚が鋭くてテリトリー（なわばり）も広い。

写真は雄。



ニシブッポウソウ

ナイロビ市内からサバンナまで広く分布していて姿を見ると必ずカメラを向けたくなる。

バブーン

人を恐れず堂々としている。
木の实を手足を使って器用に食べる。

